

聖書：士師記 11：1～33

説教題：エフタの誓願

日時：2014年7月13日

本日は 33 節までをテキストとします。前回イスラエルはまた主を捨てて他の神々へ走りまわりました。そのため、主は彼らをペリシテ人とアモン人の手に渡されました。その苦しみに陥ってイスラエルは主に叫びましたが、主は「もうわたしはあなたがたを救わない」と言われました。苦しい時だけの神頼みで、助け出されればどうせまたわたしから離れて行くだろう、と。しかし 16 節には希望の言葉がありました。主は「イスラエルの苦しを見るに忍びなくなった」と記されていたことです。主はただ彼らの苦しを見るに忍びなくなって、なお救いの御手を伸ばしてくださったのです。今日の 11 章で主はエフタを 8 番目の士師として用いて行かれます。

そのエフタはどんな人物だったかが最初の部分に記されています。1 節にあるように、彼は遊女の子でした。そのため正式な妻の子どもたちからいじめられ、家から追い出されてしまいます。「おまえはほかの女の子だから、私たちの父の家を受け継いではいけない。」と。彼は兄弟たちのところから逃げて行き、トブという地に住みます。すると彼のところにはごろつきが集まって来て、一緒に出歩くようになります。家族からも社会から見捨てられたエフタのところに、同じように社会的立場も経済力もない、やけくそになった人たちが集まって来たのです。おそらく彼らはこの地方のギャングとして、旅行者などを略奪して生活していたのでしょう。そんな彼のところに、ギルアデの長老たちが助けを求めます。6 節：「来て、私たちの首領になってください。そしてアモン人と戦いましょう。」エフタは契約を交わして、その役割を引き受けたことが、その後に書いてあります。それにしても、いくら困った状況にあるからと言って、こんなごろつきの親分に助けを求めて良いのでしょうか。エフタがこんな風にしてイスラエルのリーダーとして立てられて行くやり方はふさわしいものなのだろうか、と私たちは首を傾げてしまうところです。

しかし、この士師記 11 章が明らかにしていることは、主はこのエフタをイスラエルを救う士師として用いて行かれるということです。29 節には「主の霊がエフタの上に下った」とありますし、32 節にも「主は彼ら（アモン人）をエフタの手に渡された」とあります。私たちの頭は少なからず混乱しますが、同時に思い浮かんでくるのは 1 コリント 1 章 26～29 節の御言葉でしょう。「兄弟たち。あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。」

さて、こうしてイスラエルのリーダーとなったエフタは、さっそくアモン人を力で打ち負か

すかと思いきや、彼は使者を遣わして、できることなら平和の内に解決しようと試みます。まず彼は、なぜあなたがたは私たちの国に攻めて来るのかと 12 節で問い、アモン人の王からは「イスラエルが私の国を取ったからだ」という答えを受け取ります。それに対してエフタは、その主張は正しくないことを 15～20 節で歴史を振り返ることによって答えています。

彼がまず言っていることは、イスラエルはモアブの地もアモン人の地も取ったことはないというものです。イスラエルはエジプトを出て約束の地に向かう際、ヨルダン川東側の国に、そこをただ通らせてくださいと願い出ましたが、許可されませんでした。そこでイスラエルは迂回しながら進みましたが、エモリ人の王は信用せず、戦いを仕掛けて来ました。その結果、イスラエルはエモリ人に打ち勝ち、その地を占領したのです。その領土には、かつてアモン人に属していた土地も含まれていたようですが、これはイスラエルがアモン人から取ったわけではありません。二つ目にエフタは 23 節 24 節で、これは主が我々に与えて下さった土地だと言います。神の導きによって与えられた土地なのであって、あなたがたも、あなたがたの神ケモシユが与えてくれる土地で満足すべきではないのか、と言います。そして三つ目に 26 節で、すでにあれから 300 年の年月が経過しているとエフタは言います。もしそんなに大事な土地なら、なぜもっと早く取り戻さなかったのか。今頃になってなぜこんなことを言い始めるのか！と。しかしアモン人は受け入れません。そこで、戦いが始まります。エフタは急いでギルアデとマナセを通して人々を集め、アモン人との戦いに臨もうとします。その時、彼は主に一つの誓願を立てます。それがこの 11 章の中心となる言葉です。30～31 節：「エフタは主に誓願を立てて言った。『もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものといたします。私はその者を全焼のいけにえとしてささげます。』」

ここを読む私たちにとってショックなことは、エフタが人間を全焼のいけにえにしていることです。これは律法で厳しく禁じられていたことです。申命記 12 章 31 節：「あなたの神、主に対して、このようにしてはならない。彼らは、主が憎むあらゆる忌みきらうべきことを、その神々に行ない、自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえたのである。」まさにこの風習のゆえにカナン人たちは追い払われなければならないと言われていました。またこれは十戒の第 6 戒「殺してはならない」に明白に反しています。エフタはたった今、イスラエルの歴史を信仰の観点から立派に述べることができましたが、その次にこのような言葉を口にしてしまったということは、彼もこの時代にあつて周りの国々の影響を受けてしまっていたということの現れなのでしょう。

さらに考えてみたいのは、なぜエフタはここでこの誓願を立てたのかということです。彼はアモン人との戦いは相当難しいものになると思っていたに違いありません。次回見る 12 章 3 節で彼は、「私は自分のいのちをかけてアモン人のところへ進んで行った」と言っています。また今日の章の 30 節の言葉にも、無事に生きて帰って来れるかどうか定かでないといった彼の心境が感じられます。そういう極めて困難な状況において、彼は勝利を少しでも確かなものにしたいと強く願い、この誓願を立てた。しかしこれは本質的に「神との取り引き」だったの

ではないでしょうか。私はこうしますから、あなたはこうして下さい。あなたが私を助けて下さるなら、私は何を代わりに差し出しても良いのです！と。エフタとしては頭に思い浮かんだ最高の犠牲を示したつもりだったのでしょうか。家の戸口から出て来る者とは、誰になるかわかりません。彼としてはしもべやはしための一人を考えていたと思いますが、あらかじめ誰かを決めていたのでは、自分に都合の良い取り引きをしていることになりかねません。そこで彼は自分のリスクをあえて大きくした。そしてそれが誰になるかさえも、主よ、私は何の条件も付けずにあなたに委ねます！ですから私を助けて下さい！一見非常に信仰的な感じがします。しかし根底にあるのは何でしょう。それは取り引きの考えでしょう。私はここまで自分を賭けるのですから、あなたも私に確かに恵みを与えて下さい。自分のこの献身、パフォーマンス、ささげものによって、神の愛顧を勝ち取ろうと計っている。言い換えれば、こうして神を操作しようとしている。

果たして私たちはこれと似たような祈りをしていないでしょうか。「もしあなたがこのことをかなえて下さるなら、私はこれこれのことを今度から致します。約束します。ですからどうか今、私に恵みを施して下さい！」事態が深刻であればあるほど、そのような祈りをする誘惑があります。何とかしてこの状況から救われたい、あるいはどうしてもこのチャンスを失いたくないという強い願いがある時、私たちは何かを引き換えに差し出しても良いから導いて下さいと祈りやすい。しかしこのエフタの誓願がどんな悲劇をもたらしたかを次回見ることになります。非常にショッキングな結末が待っています。このような記事を通して、士師記 11 章は、このような取り引きは主に喜ばれるものでないということを語っています。

では、エフタはどうすれば良かったのでしょうか。それは取り引きではなく、主の恵みとあわれみに信頼する道に行くことでした。確かに危急の状況において、ただ恵みにより頼むだけで本当に大丈夫なのか、心配になるものです。それが聖書の原則だと頭では分かっている、不安で不安で仕方がなくなる。そこで神の祝福をより確かなものにしたくて、「私はこれこれのことをいたします。ですからあなたはこれこれのことをしてください。」という交換条件を出しやすい。しかしこれは恵みに信頼する信仰の道ではなく、自分のわぎに基づいて神に祝福を要求する「ギブ&テイク」の世界です。神をこの方法で拘束し、私の思う通りに操作しようとする世界です。神は決してこれを良しとはされないのです。

この道を行かないために必要なこと、それは普段から日々、恵みの原則に生きることではないでしょうか。もし常日頃から自分はただ神の一方的な恵みとあわれみによって生かされていることを感謝し、主の恵みにより頼んで生活しているなら、その人は困難な状況に陥った時も、今更神に交換条件を提示しようとはしないでしょ。むしろ常に一方的な恵みとあわれみによって導いて下さった神こそ、この時も私の唯一の慰めであり、希望であると告白して、一層恵みに信頼して歩むことでしょ。しかし常日頃からそのように歩んでいないと、私たちは突然「ギブ&テイク」を神に持ちかけてしまう。そういう意味で困難な時こそ、私たちが日々どんな原則によって生きているのか、試される時でもあるのでしょ。私たちは特別な時だけ、特別に生きることにはできないのです。普段の生き方が、何かの時に出るのです。ですから私たち

が今日という日をどう生きるかということが、決定的に重要なのです。その今日の生き方が、人生の重大な局面における私の歩みを決定づけるのです。

果たして私たちの今日の神との関係はどうでしょうか。この時のイスラエルが、10章16節の「主は、イスラエルの苦しみを見るに忍びなくなった」という一方的なあわれみによって導かれていたように、私たちも主の一方的なあわれみと忍耐とによって、今日の歩みを導かれている者たちです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、なだめの供え物としての御子を遣わして下さったという神の恵みのみわざによって生かされている者たちです。神がそのように恵みとあわれみによって私を導いてくださっていることを仰いで、今夕も主に心からの感謝の礼拝をささげたいと思います。そのようにする人は危急の時も、主の恵みにどこまでもより頼むでしょう。そしてそのようにする人は決して恵みの上にあぐらをかく生活はしません。その人は主に心から感謝している者として、主の恵みに応答する生活へと進みます。主は取り引きではなく、そのような恵みに応える歩みへと私たちを招いておられるのですし、それこそを喜んで受け取ってくださるのです。